2013/10/5-6「両大戦間における日仏関係の新段階」イントロダクション

「なぜ《両大戦間、日仏関係の新段階》なのか？」
« En quoi l'entre-deux-guerres constitue-t-il une nouvelle phase des relations franco-japonaises ? »

三浦信孝　MIURA Nobutaka（中央大学、日仏会館）

なぜ両大戦間か？―シンポジウム趣旨と講師紹介

日仏文化交流のためのフランス会館 Maison de France 設立構想は、第一次世界大戦終結の翌 1919 年にフランス政府が日本に派遣したリヨン大学使節団にさかのぼる。1921 年 3 月に日仏協会 Société franco-japonaise（1909 年設立）の中に渋沢栄一を長とする設立準備委員会がつくられ、同年末のクローデル大使の着任により構想が具体化し、22 年末には日仏会館 Maison franco-japonaise の名称が確定する。関東大震災があった 1923 年の翌 24 年 1 月に「日仏会館設立趣意書」が発表され、3 月 7 日に文部省から財団法人としての設立許可が下り、12 月 14 日に開館式が行われる[1]。したがって、日仏会館は正確には来年 2014 年に設立 90 周年を迎える。

会館 90 周年の記念行事として、私は二つ、正確には三つのシンポジウムを提案した。第一が今日明日の２日間開かれる「両大戦間における日仏関係の新段階」で、第一次大戦後 1920 年代はじめにどうして日仏が接近して日仏会館が設立され、交流がいかに深まったかを振り返る。フランス語タイトルは Le rapprochement franco-japonais dans l'entre-deux-guerres とし、日仏間の「接近」にアクセントをおいている。第二が来年 6 月末に予定している「変化する世界と日仏協力の未来」シンポで、今年 6 月のオランド大統領の公式訪問を受けて、グローバル化が進む 21 世紀における日仏協力の未来を、国際政治、経済、社会、文化の分野で分析し展望する。第一のシンポは日仏会館とフランス事務所が協力して準備した会館恒例の日仏シンポジウムだが、来年の「日仏の未来」シンポはフランス大使館との共催で行うハイレベルの Sommet culturel franco-japonais になるはずである。

三つ目は、 来年 6 月はじめにパリ日本文化会館との共催により行うパリ・シンポで、これは過去の渋沢・クローデル賞受賞者の日仏 10 人が一同に会し、人文社会科学分野での日仏学術交流の成果を世に問うものである。渋沢・クローデル賞は会館創立 60 周年にあたる 1984 年に創設されたから、パリ・シンポは賞の 30 周年記念の性格をあわせもつ。クローデル賞はもとはと言えば 1966 年に始まったフランスの文学や人文書のすぐれた翻訳に与えられる翻訳賞だったが、10 年足らずで中断され、1984 年に渋沢・クローデル賞として復活したときは、日本人のフランス研究とフランス人の日本研究のすぐれた成果を顕彰する双方向の賞に衣替えして再スタートした。フランス語から日本語への翻訳という一方向から双方向の研究交流へと舵を切る大きな一歩だったと言える[2]。

---

[1] 日仏会館の歴史については、会館創立 50 周年にあたる 1974 年の『日仏文化』31 号に日仏両語で掲載された Bernard Frank・彌永昌吉「日仏会館の歴史、目的および活動」が基本文献である。Maison de France に代えて双方向的な Maison franco-japonaise の名称を提案したのは、1922 年 11 月に「日仏会館目論見私案」に署名した杉山直治郎だと想定される。杉山については注 12 を参照。

[2] 坂井光夫・松原秀一「渋沢・クローデル賞の八年」『日仏文化』55 号、1992 年。

実は本シンポジウムにも渋沢・クローデル賞の受賞者が 4 人おり、パリ・シンポに参加する 10 人と重ならないよう配慮している。フランス側では今日トップバッターとして登壇する「Clemenceau と日本」の Matthieu Séguéla と、歴史家で日本の植民地主義史を研究する Arnaud Nanta、日本側では明日報告する藤田嗣治研究のトッププランナー林洋子と、日仏の東洋学者 orientalistes の交流に詳しい藤原貞朗である。日仏文化研究ではフランス人は日本について研究し、日本人はフランスについて研究するので、研究対象は chassé-croisé で必ずしも交差しないが、今回のシンポジウムには日仏双方とも、比較の視点をもって多かれ少なかれ日仏交流史に関わってきた研究者にお集りいただいている[3]。

さらに付け加えるなら、フランス側は『絹と光 Soie et Lumières』『刀と筆 Sabre et Pinceau』の著作で知られる日仏交流史の第一人者 Christian Polak[4]、元関西日仏学館館長でクローデル研究の Michel Wasserman、現在日仏会館の directeur français[5] で近代日本美術史の Christophe Marquet ら、かつて会館の pensionnaires だった japonologues、若い世代では先に名前を挙げた Arnaud Nanta や考古学の Laurent Nespoulous という会館 6 階の国立フランス日本研究センター研究員として滞在中の japonologues を揃えている。

Pensionnaires ないし chercheurs と呼ばれる研究者の講師を紹介したのはなぜか。それは、日本にフランスの学術文化を紹介普及するだけでなく、若いフランス人のうちに日本語に習熟した日本研究者を養成するという Paul Claudel が日仏会館に期待した役割を会館が立派に果たしてきた成果がここにあるからである。生糸貿易により日仏交流史で特に重要な位置を占めるリヨン[6]から来ていただいた比較法学者の Béatrice Jaluzot 以外は、すべて日本在住の第一線の日本研究者で、これはフランスから講師を招聘する予算がないからという消極的理由からではないことを強調しておきたい。

相互性の原則から日本側講師を紹介するならば、フランス文学研究からはまず中條忍。クローデル研究の第一人者で、最近クローデルの詳しい滞日年譜を日本語とフランス語の両方で出版された。同じく仏文学者の小林茂は、1929 年パリ国際大学都市に留学生会館 Maison du Japon をつくった薩摩治郎八の評伝を書かれており、その日本館の元館長でもある。美術史からは先ほど紹介した画家 Fujita の林洋子と、東洋学におけるフランス極東学院 EFEO と日仏会館の知られざる密接な関係について話していただく藤原貞朗、丹下健三以来フランスで評価の高い日本人建築家は多いが、いわばその大元をつくった Le Corbusier の日本人の弟子たちについて話していただく山名善之、そして last but not least で、中国近代外交史の川島真にはすぐ後の第一セッションで登壇いただく。インドシナ半島を拠点に中国での勢力拡大をはかるフランスと、朝鮮半島を足場に大陸進出を企てる日本との、対中国政策におけ

---

[3] 本稿では研究者の敬称を省略させていただく。

[4] Christian Polak, « Les relations franco-japonaises », Michelin Japon, Coll. Le Guide Vert, 2013 は簡にして要をえた日仏関係史である。

[5] Directeur français à la Maison franco-japonaise は代々「日仏会館フランス学長」と呼ばれてきたが、2010 年の公益財団法人移行により「日仏会館フランス事務所所長」に変更された。

[6] 1876 年に日本を訪れた Emile Guimet (1836-1918) に始まる日仏のリヨン人脈 connection lyonnaise については、とりあえず藤原貞朗「日仏会館誕生前史—リヨンと日本の知られざる文化交流」（『青淵』728 号、渋沢栄一記念財団、平成 24 年 11 月）を参照。

る帝国同士の利害の一致と不一致を見ることは、両大戦間の日仏関係を単なるバイラテラルではなく、多元的かつ立体的にとらえる上で重要だと思われる。

本シンポジウムが両大戦間の日仏関係をとりあげるのは、日仏会館 90 周年の来年が、1914 年に始まった第一次大戦の 100 周年にあたるからでもある。「戦間期」とは 1918 年の第一次大戦の終結から 1939 年の第二次大戦の勃発までの約 20 年間を指すが、日本にとって前者は英仏と組んでドイツと戦った戦争であり、後者は独伊と枢軸を結んで米英と戦った戦争である。グローバリゼーションがいつから始まるかについては種々議論があるが、日清戦争（1894-95）、日露戦争（1904-05）と違い、日本がヨーロッパを火元とする欧州大戦に参加して漁夫の利を得た第一次大戦が、グローバル化の重要なメルクマールであることは明らかだろう。

1914 年夏ヨーロッパで戦争が勃発すると、日本は 1902 年の日英同盟(Anglo-Japanese Alliance)をタテに 8 月 4 日ドイツに宣戦布告、翌年 1 月には中国に、山東半島におけるドイツの利権継承を盛り込んだ「21 カ条要求」を突きつける。日露戦争のときは露仏同盟によりロシアを支援したフランス[7]は、1907 年クレマンソー首相が結ばせた日仏協約(Entente franco-japonaise) によって日本を、ドイツに対抗する英仏露の三国協商の側に引き寄せる[8]。クレマンソーを議長とする 1919 年のパリ講和会議で締結されたヴェルサイユ条約が、ドイツに巨額の賠償金を課すとともに、日本による山東半島のドイツ権益の継承を承認すると、中国ではこれに抗議して「五・四運動」の激しい排日運動が起る。朝鮮では「三・一」独立運動が起っていた。

大戦中に起った世界史的事件は 1917 年 10 月のロシア社会主義革命である。革命に武力干渉するため日本は英仏の要請でアメリカとともにシベリアに出兵する。英仏米が撤兵したのちも日本は駐留を続け、国内外の非難により 22 年に撤兵するが、多大な戦費を費やしただけでなんら得るところがなかった。

他方、大戦後世界の覇権はイギリスからアメリカに移る。1921 年 11 月から翌 22 年 2 月までワシントンで開かれた海軍軍備制限と太平洋と極東問題に関する国際会議で、アメリカの圧力により日英同盟は廃棄され、日本は国際社会で孤立、パリ講和会議で獲得した山東条項は列国の監視のもとに放棄を迫られる。日本の大陸進出を封じ込めるアメリカ主導のワシントン体制の成立である[9]。

ドイツの敗戦を受け日本におけるフランスのプレゼンス強化のため、53 歳のクローデルが駐日大使として着任するのは 1921 年 11 月だが、そのとき 81 歳の渋沢栄一はワシントン会議視察のため四度目の渡米をし、悪化する一方の対日感情の改善に努めていた。日仏会館ができた 1924 年は、アメリカで排日移民法が成立した年で

---

[7] 露仏同盟(Alliance franco-russe) は 1891-94 年に締結されており、フランスは日清戦争後、満州進出を狙って日本の遼東半島領有に反対するロシアに追随して三国干渉に参加する。

[8] 第一次大戦は英仏露の三国協商(Triple Entente) と独墺伊の三国同盟(Triple Alliance)の衝突だったが、フランスにとっては 1870 年の普仏戦争での敗北のリベンジだった。なお 1902 年の日英同盟には Alliance の語が、1907 年の日仏協商には 1904 年の英仏協商(Entente cordiale)と同じ Entente の語があてられており、Entente は軍事同盟の色彩が強い Alliance よりは緩やかな協力関係と考えられる。

[9] 日本政治外交史の三谷太一郎は、第一次大戦による世界史の転換を「ヨーロッパ的世界秩序の崩壊とアメリカの擡頭」という印象的な言葉で要約している（『新版　大正デモクラシー論　吉野作造の時代』東京大学出版会、1995 年、第三章）。第一次大戦後の日本にとっては「ヴェルサイユ体制からワシントン体制へ」の重心の移動が決定的インパクトをもつ。

ある。思えばパリ講和会議で 日本が国際連盟規約に盛り込むよう提案した人種差別撤廃条項は、アメリカの強い反対で採択されなかった。しかもそのアメリカは、上院の反対によりヴェルサイユ条約にも国際連盟にも参加しなかったのである。

今年 2 月に会館で行われた Mathieu Séguéla の渋クロ賞受賞記念講演で私がいちばん驚いたのは、第一次大戦直後からフランスの軍指導部の間では、次の戦争は日米間で起るという認識が広まっていたことである。クレマンソーは、1920 年から 26 年までサンシール陸軍士官学校や政治学院に学んだ東久邇宮稔彦王に[10]、日米には国力の差があるから日本はアメリカの挑発に乗ってはいけないと忠告していたという。東久邇宮は帰国後クレマンソーの忠告を周囲に伝えるが、西園寺公以外は聞く耳をもたず、日本は対米開戦に突き進む。皮肉なことに東久邇宮は 1945 年 8 月の敗戦直後に首相に任じられ、短期間だが敗戦処理にあたることになる[11]。

日仏関係史の三段階：1858/1918/1980

ここでもう一度「なぜ《両大戦間、日仏関係の新段階》なのか？」という問いに立ち帰り、両大戦間を日仏関係史の長期持続の中に位置づけてみることにする。

日本が鎖国を解き西洋列強と外交関係を結んで以来の日仏関係史を、松浦晃一郎（現会館理事長）は駐仏大使時代に出されたフランス語の著書で四つの時期に分けている[12]。第一期は 1858 年の日仏修好通商条約から 1911 年の条約改正まで。安政の五カ国条約は日本に関税自主権がなく領事裁判権を認める不平等条約だったから、明治期の日本外交の悲願は条約改正だった。それが 1910 年日韓併合の翌年に実現したわけである。第二期は 1911 年から第一次大戦を経て第二次大戦が終る 1945 年まで、第三期は 1945 年から 1980 年まで、第四期は 1980 年から現在までの四段階である。近代日本外交史としてまことに妥当な時期区分だが、私は同じ日仏関係史を 60 年周期の三段階で考えてみたいと思う。

なぜ 60 年周期か。明治の 45 年と大正の 15 年を足すと 60 年、昭和は 63 年で、日本の近現代史は 60 年周期を描いて明治と昭和が反復するという柄谷行人の仮説がヒントになる。明治憲法は明治 22 年（1889 年）に発布されるが、新憲法も昭和 21 年（1946 年）に発布される。 明治 45 年（1912 年）明治天皇崩御の報に接し乃木将軍は殉死するが、昭和 45 年（1970 年）には「などて天皇（すめろぎ）は人間（ひと）となりたまいし」と英霊に言わせた三島由紀夫が自決する。他の事件の暗合は省略するが、1984 年に「批評とポストモダン」を書いたとき柄谷は、1990 年代は 1930 年代を反復し、日本のポストモダンは戦前の「近代の超克」に似たものになるのではないかと予想した。しかし、こうした周期性は日本だけの現象ではない。1989 年の冷戦の終りが昭和天皇の死と相前後して起ったとき、偶然とは言えない世界史の同時性と周期性に気づいたという柄谷は、それを世界資本主義がとる周期性によって説明する[13]。

1917 年のロシア革命で始まった社会主義の実験は 70 年後の 1989 年に終息したが、1789 年のフランス革命から 60 年後の 1848 年には二月革命が起り、しかもそ

---

[10] 日仏会館初代総裁の閉院宮戴仁親王(1865-1945)も、1883-91 年にサンシール陸軍士官学校、ソミュール騎兵学校、陸軍大学校に学んだ皇族軍人である。

[11] 「宮様総理・東久邇宮稔彦」については鹿島茂『パリの日本人』新潮選書、2009 年を参照。

[12] Matsuura Koïchiro, *La diplomatie japonaise à l'aube du 21e siècle*, POF, 1998.

[13] 『柄谷行人　政治を語る』図書新聞、2009 年、第三章。

れぞれの革命の後には、ナポレオンとその甥ルイ・ナポレオンのクーデタによって共和政が倒れ帝政が成立する。歴史は繰り返す、一度目は悲劇として、二度目は喜劇として、とマルクスは言った。1848 年は『共産党宣言』が発表された年だが、そのほぼ 60 年後には 1905 年と 1917 年のロシア革命が起り、120 年後の 1968 年にはパリで五月革命が起り、それが世界に波及する[14]。Revolution という語は「革命」以外に天体の「回転」「公転」を意味するから、歴史の大きな転換が周期的に起るのは当然かもしれない。2020 年のオリンピックは東京に決まったが、1964 年の東京オリンピックから数えて 56 年、1945 年のヒロシマと 2011 年のフクシマを隔てるのも 65 年である。

以上の 60 年周期説は必ずしも学問的根拠のある理論ではなく、樋口陽一の「四つの 89 年」論と同様、世界史を大きくとらえるための heuristique（発見原理的）な仮説にすぎない[15]。そう断った上で、これを日仏関係史にあてはめてみると、日仏修好通商条約が結ばれた 1858 年から 60 年後は第一次大戦が終る 1918 年で、フランスは、戦勝国として五大国の列に加わった極東の帝国に注目し、同盟国だった日本との関係強化に本腰を入れる。1918 年から第二次大戦の大きな断絶をはさんでほぼ 60 年後の 1980 年は、敗戦から奇跡的復興をとげた日本の経済進出が欧米にとって脅威となり、ミッテランによる共和国大統領初の公式訪問によって日仏関係が「ライバルからパートナーへ」と深化する転換期にあたる。80 年代に名実ともに世界第二の経済大国になった日本は、単なる G 7 の一員から日米欧の三極を形成する勢いにあった。1980 年から 30 余年を経た今日われわれは、冷戦後世界の大変動に対応できないまま、第三ステージの折り返し点に立たされていると言えるかも知れない。

日仏交流史を 60 年ごとの三段階に分けて振り返るとき、それぞれのステージでの日仏協力ないし日仏接近を支えたエンブレム的人物が問題になる。

去る 6 月、1982 年 5 月のミッテラン訪日を 30 年ぶりに再現するように日本を公式訪問したオランド大統領は、国会での演説の冒頭で、「日本の賛美者だったクレマンソーと親交が深かった西園寺公望」、啓蒙思想を伝える仏学塾を開いた「東洋のルソー」中江兆民、横須賀製鉄所をつくった Leonce Verny、日本に「直感的親近感」を抱いた詩人大使クローデル、そして 2012 年パリの Salon du Livre に参加したノーベル賞作家大江健三郎の名前をあげて、日仏交流の歴史を振り返った。宮中晩餐会では、はじめに天皇陛下からお言葉があり、ちょうど 60 年前の皇太子時代にはじめてフランスを訪れたときの想い出が語られ、「日本近代法の父」Boissonade と富岡製糸場をつくった Paul Brunat の名前をあげて、日本の近代化にフランスがはたした貢献に感謝されたという。オランド氏はその答礼で Lévi-Strauss の日本論の一節を引き、印象派の Claude Monet に影響を与えた日本の美学を讃え、渋沢栄一とク

---

[14] 世界システム論で知られる I. ウォーラステインは『反システム運動』（大村書店、1992 年）で、「世界革命はこれまで二度あっただけである。一度は 1848 年に起っている。二度目は 1968 年である」と述べている。

[15] 「四つの 89 年(Les quatre « Quatre-vingt-neuf »)」は比較憲法学者の樋口陽一（前会館理事長）が 1989 年のフランス革命 200 周年記念パリ国際学術集会で報告した仏語論文のタイトルで、1689 年イギリスの権利章典、1789 年フランスの人と市民の諸権利の宣言、1889 年日本の明治憲法、1989 年の天安門事件と東欧革命と、100 年刻みで西洋起源の立憲主義が世界に展開した歴史を象徴的に要約する表現。翻訳は拙編『〈共和国〉はグローバル化を超えられるか』平凡社新書、2009 年所収。

ローデルが設立して 90 年の日仏会館による文化交流の深まりを言祝いだ。ここには日仏交流のパンテオン（万神殿）に祀られるべき人々が、あたかも日仏で示し合わせたかのように、過不足なく選ばれている。

しかし、60 年周期の三段階説から言えば、そのほとんどは幕末明治の交流の第一ステージで活躍した人々で、われわれはすでに 2008 年の日仏修好 150 周年で仏学史学会の協力を得て日仏交流の黎明期をほぼ網羅的にとりあげている[16]。したがって本シンポジウムでは、日仏交流の第二ステージにあたる両大戦間期に焦点をあて、渋沢栄一とクローデルの名前の影に埋もれて忘れられている数多くの日本人とフランス人の交流ネットワークを浮き上がらせようと思った。

われわれにとって日仏会館の歴史の正典は Bernard Frank, « La Maison franco-japonaise, son histoire, ses buts, son fonctionnement »（注 1 参照）だが、私がこのシンポジウムを準備するにあたりはじめて読んだ資料は、1926 年に着任した 初代会館 directeur français の Sylvain Lévi が帰任後 1929 年に雑誌 *La Revue de Paris* に寄稿した « La Maison franco-japonaise de Tokyo » である。Lévi は Collège de France 教授の高名なインド学者であり、会館創立当初にはまだ会館のフランス学長を勤められる日本研究者は育っていなかった[17]。

日本人の論文では、設立準備段階から戦争中までおそらく会館運営の中心にいた常務理事の杉山直治郎が 1933 年の『日仏文化』新 5 号に執筆した「日仏文化関係—起源、現状および展望」が参考になった。杉山は、1877-83 年リヨンに留学して最初に法学博士号を取得した富井政章[18]の弟子にあたり、1916 年東大のフランス法教授、1921 年に設置された会館設立 7 人委員会の一員で、24 年に会館が設立されると理事になる。第一次大戦後なおドイツと英米文化の影響が強い日本で、フランス語フランス文化の研究がいかに重要かを力説し、フランスに対しては中国研究偏重を正しもっと日本に目を向けるよう訴えた親仏派の愛国者で、能にも造詣が深い[19]。

---

[16] 日仏修好 150 周年記念の会館文化講座の記録として「日仏交流のあけぼの」『日仏文化』78 号、2010 年、教養講座の記録として西堀昭『日本の近代化とグランドゼコール、黎明期の日仏交流』つげ書房新社、2008 年がある。東京大学総合研究博物館では「維新とフランス、日仏学術交流の黎明」展が開かれ、カタログに Christian Polak が「日仏交流略史」を執筆している。

[17] 日仏会館の最初の pensionnaire は 1925 年から 32 年まで滞在した日本研究者 Charles Haguenauer (1896-1976)で、パリ東洋語学校でその教えを受けた Bernard Frank (1927-96) は 1954 年から 3 年間 pensionnaire として会館に滞在し、1972 年から 74 年まで日本学者として初の会館フランス学長を勤める。碩学が Collège de France 初の日本学講座教授に選任されるのは 1979 年だが、中国学講座は 19 世紀末にすでに設置されており、ハノイの極東学院を経て 1926-30 年会館に pensionnaire として滞在した中国学者 Paul Demiéville は 1946 年に Collège de France 教授に選出されている。

[18] 富井政章は民法典論争で断行派だった梅謙次郎、延期派だった穂積陳重（八束の兄）とともに、1890 年のボアソナード民法に代る現行民法の起草者だった。1924 年に日仏会館副理事長、1933-35 年に第 3 代理事長を勤める。

[19] 1931 年の派遣講演者 Henri Capitan、第 3 代フランス学長(1933-36) の Léon Julliot de la Morandière 、第 4 代(1936-39)の Léon Mazaud と一連の法学者を迎えたのは杉山で、1966 年に杉山が亡くなると、Julliot de la Morandière は *Bulletin international de la législation comparée* に長文の弔辞を寄せている（Persee で検索可能）。

杉山は 1946 年の『日仏文化』新 11 号に「ジャン・レイ博士[20]を悼む」を寄せているが、Boissonade の名前しか知らないわれわれにとって、1931 年の満州事変のあとリットン調査団の報告により国際連盟から問責非難され、33 年ついに連盟脱退に追い込まれる日本の立場を擁護しつづけたフランス人法学者がいたとは驚くべき発見である。関東軍が満州事変を起した 1931 年は、フランスがアルジェリア征服 100 周年を祝った翌年パリのヴァンセンヌで植民地万博が開かれ 800 万人を動員した年である。杉山がいたく感激した Jean Ray の最後の著作に、日本を「現代の大国」として高く評価する *Le Japon, grande puissance moderne* (1941) があるが、1937 年の盧溝橋事件で中国侵攻を始め、やがて対米英開戦に突き進む日本に、はたしてフランスの世論が好意的だったかどうか。1931 年に最初の選抜試験が日仏会館で行われたフランス政府給費留学生制度は、1939 年に最後の留学生を送り出したあと、1950 年に再開されるまで中止される。

1980 年以後の日仏会館

最後に、時間が許すかぎりで、私にとっての日仏会館について一言し、イントロダクションの結びとしたい。

私の会館との最初の出会いは、1968 年 Paul Claudel 生誕 100 年の年にさかのぼる。クローデルが偶然とはいえ明治維新と同じ 1868 年に生れたことは、日本との浅からぬ因縁を感じさせる。当時フランス語の学生だった私は、東京日仏学院 L'Amicale の仲間と語らって、御茶の水にあった日仏会館の地下ホールで（400 席以上の大ホールだった）、クローデルの戯曲『真昼に分かつ *Partage du midi*』(1905)のフランス語原語上演を企て、無謀にも主役のメザを演じたのである。幕が降りたとき拍手してくれ楽屋まで来てくれたのは、文化使節として来日していたクローデル役者の Alain Cuny だけだった。

1970 年秋に日仏会館でフランス政府給費留学生試験を受け、翌年秋にパリに留学、78 年に帰国した後は会館の学術講演の通訳をときどき頼まれるようになった。小林善彦常務理事（のち副理事長）の発案により 1980 年に始まったフランス文化講演シリーズ[21]で、1983 年 5 月パリ東洋語学校 INALCO で教えた経験を元に「フランス語と日本語、二つの言葉・二つの制度」と題して講演させていただいたり、1986 年秋の第 4 回日仏文化講座「現代フランス哲学の諸相」（オーガナイザは東大哲学科の坂部恵教授）で Paul Valéry について報告させていただいた[22]。しかし日仏会館は、私にとって何よりもまず、日本に居ながらにして Jacques Derrida（初来日は 1983 年 10 月）や Pierre Bourdieu（初来日は 1989 年 10 月）などフランス最先端の学者や思想家の話を聴ける「知の殿堂」として仰ぎみる存在だった。

私が 1980 年代を日仏交流が一方通行から双方向に向かい出した第三ステージと位置づけるのは、1982 年 5 月のミッテラン訪日によって日仏賢人会議や特に日仏文化

---

[20] Jean Ray (1884-1943)は高等師範学校卒の法学者・哲学者・社会学者で外交官。1916-19 年の東大仏蘭西法教授を振り出しに、日本外務省法律顧問やパリ日本大使館嘱託を勤めた。

[21] 通称月例講演会、第 1 回は 1980 年 5 月作家なだ・いなだの「フランスとわたし」。

[22] Valéry (1971-1945)は 1917 年の長詩 *La Jeune Parque* で長い沈黙を破り、1919 年の講演「精神の危機」が有名だから、まさに大戦間期の作家である。国際連盟の知的協力委員会の中心的存在だった。1938 年から 1 年フランスに留学した中村光夫は Collège de France で Valéry の詩学講義を聴いている（『戦争まで』1942 年）。

サミットなど対等な知的対話の枠組みができ[23]、日本文学のフランス語への翻訳が盛んになったからであるが[24]、日仏会館でも主として建物の管理だけをしていた財団法人が独自の講演会や講座のプログラムを始め、また 1984 年の会館 60 周年を機に渋沢・クローデル賞が双方向の学術奨励賞として復活したからである。

1995 年シラク大統領による南太平での核実験再開で反仏感情が高まったが、1997 年の「フランスにおける日本年」にはパリの Salon du livre に日本が特別招待され、パリ日本文化会館がオープンする。98 年の「日本におけるフランス年」には会館で日仏関連諸学会の総合シンポがあったが、私はフランスの社会変容について小さなターブルロンドを組織した。それを皮切りに、1999 年には INALCO との共催で「言語帝国主義の過去と現在」、2001 年には中央大学の文学シンポジウム「フランスの誘惑・日本の誘惑」を会館ホールで開催し、同年 6 月には Pierre Souyri フランス学長に提案し、雑種文化論の加藤周一とマルチニック出身の黒人作家 Edouard Glissant の討論「グローバル化かクレオール化か—文明の対話・文化の混淆」を第 1 回春秋講座として組織した。その数週間後にニューヨークで「9・11」が起きたので忘れることができない。

2002 年に常務理事を仰せつかってからは学術委員会で毎年のように日仏文化講座や日仏シンポジウムを企画してきたが、そうした中で 2004 年の会館設立 80 周年と 2008 年の日仏修好 150 周年を迎えたわけである[25]。2004 年の 80 周年では「近代日本の建設とフランス」と「両大戦間のパリの日本人」という二つの日仏文化講座で行われた計 10 本の講演を『近代日本と仏蘭西—10 人のフランス体験』にまとめ、3 月 7 日の記念午餐会に合わせて刊行した。

渋沢栄一がパリ万国博覧会に派遣された幕府使節団の一員としてフランスに渡ったのは明治維新の前年の 1867 年だが、1870 年のパリ・コミューンの最中にパリに到着し 10 年滞在した西園寺公望、岩倉使節団の留学生として 1871 年に渡仏した中江兆民、84 年に渡仏して 10 年滞在した「日本洋画の父」黒田清輝[26]、あこがれの

---

[23] 1981 年に日仏政府間で設置された「日仏の明日を考える会」（通称日仏賢人会議）の討議は 1984 年 4 月『日仏関係—その現状と展望』としてまとめられた。1984 年 5 月日本で開催された朝日新聞社とフランス文化省主催の第 1 回日仏文化サミット(Sommet culturel franco-japonais)は同年 12 月『文化の将来 *L'Avenir de la Culture*』として会議記録が公刊されている。文化サミットはその後も 90 年代はじめまで日仏交互で数回開催された。

[24]小西財団の助成により Gallimard 書店から刊行された *Anthologie de nouvelles japonaises contemporaines*, 2 tomes (1986, 1989), *Anthologie de poésie japonaise contemporaine* (1986)と 1986 年にアルルに設立された Philippe Piquier 社による日本文学の翻訳が特筆に値する。

[25] 私が会館で組織したセミナーやシンポジウムのうち活字にしたものに以下のものがある。『言語帝国主義とは何か』藤原書店、2000 年；『普遍性か差異か—共和主義の臨界、フランス』藤原書店、2001 年；『来るべき〈民主主義〉—反グローバリズムの政治哲学』藤原書店、2003 年；『フランスの誘惑・日本の誘惑』中央大学出版部、2003 年；『近代日本と仏蘭西—10 人のフランス体験』大修館書店、2004 年；『トクヴィルとデモクラシーの現在』東京大学出版会、2009 年；『〈共和国〉はグローバル化を超えられるか』（J.-P.シュヴェヌマン、樋口陽一との共著）平凡社新書、2009 年；『自由論の討議空間—フランス・リベラリズムの系譜』勁草書房、2010 年；「植民地主義の過去、未来のための記憶」『日仏文化』80 号、2011 年。

[26] 黒田は 1924 年 7 月に亡くなるまで大使クローデルと親交があり、同年 5 月の仏領インドシナ総督 Martial Merlin の訪日に尽力した。

フランスに行きたい一心で 1903 年からアメリカに勤務し 1907 年に渡仏、リヨンの横浜正金銀行[27]に勤めた永井荷風が、明治期の 5 人である。

第一次大戦前夜の 1913 年にパリに渡り、やがて Ecole de Paris の寵児になる藤田嗣治。1921 年に渡欧し 8 年にわたりドイツとフランスに滞在し、Heidegger の驚駭に接し Bergson の哲学に親しんだ哲学者の九鬼周造（九鬼の『いきの構造』はフランス語に翻訳されている）。1922 年に上海経由でフランスに渡り、Saint Denis のメーデーで演説して逮捕され Santé 刑務所に投獄されたアナーキストの大杉栄。大杉は東京外国語学校でフランス語を学び、ファーブルの『昆虫記』の最初の訳者でもあるが、パリから日本に送還されたため、1923 年 9 月 1 日関東大震災の混乱の中で憲兵によって殺害される（甘粕事件）。1919 年につづき 28 年から 6 年間ヨーロッパ流浪の旅に出る『ねむれ巴里』の詩人金子光晴（金子の『絶望の精神史』も仏訳されている）。人民戦線内閣が成立する 1936 年にヨーロッパ文明との対決をめざして渡仏した『旅愁』の小説家横光利一。以上が大戦間期の 5 人である。取り上げられなかった大物は、1930 年から 10 年パリに滞在し、シュルレアリスム運動に直接触れ、民族学者 Marcel Mauss の講義を聴講した前衛芸術家の岡本太郎であろうか。

80 周年記念で私が編集した『近代日本と仏蘭西』で自慢できるのは、永井荷風については加藤周一、大杉栄については鎌田慧、九鬼周造については坂部恵、金子光晴については安藤元雄というように、一流の人間について一流の人間が語っていることで、知的遺産の継承はこのように世代ごとに反復し反芻して行われる、という思いをあらたにする。われわれは荷風を読む加藤周一を読み、追体験し、語りつぐ[28]。ルソーを翻訳した中江兆民の著作を読み、その思索の軌跡を追体験し、語りつぐ。周年の記念行事はまさにそうした知的遺産の継承発展のためにあるのではなかろうか。しかもフランスの作家を翻訳して自分の思想や文学をつくった日本人作家の著作を今度はフランス人が研究し、フランス語に翻訳するという双方向の交流が、1980 年代に始まった第三ステージで近年目立つ傾向である[29]。

日仏会館は 2000 年代になって財団法人とフランス事務所の企画するプログラムが拮抗し補完し合うようになった。両者の協力による本シンポは、過去 10 数年来積み重ねてきた日仏シンポジウムの一つの到達点である。過去の研究の単なる繰り返しではない、新しい発見や発掘がいろいろ出てきそうな予感がしており、討論時間を多めにとって、 講師の間での討議と会場からのご質問に期待するゆえんである。

---

[27] 横浜正金銀行のリヨン支店は 1882 年に開設され、横須賀製鉄所でフランス語を習得し、Jules Vernes の『80 日間世界一周』を翻訳した川島忠之助が 1895 年まで 13 年も駐在したことを以下の本で知った。川島瑞枝『我が祖父　川島忠之助の生涯』皓星社、2007 年。

[28] 「戦後日本の良心」とも言うべき加藤周一(1919-2008) の著作を読みつぐため、会館は 2010 年から彼の誕生日 9 月 19 日に加藤周一記念講演会を開いている。初回の講師は海老坂武。加藤は 1951 年の、海老坂は 1963 年の渡仏留学生である。

[29] 加藤周一の『日本文学史序説』が Fayard 社から仏訳されているのは当然として、『日本文化における時間と空間』は *Le temps et l'espace dans la culture japonaise* (CNRS, 2009)として、中江兆民の『三酔人経綸問答』は *Dialogue politique entre trois ivrognes* (CNRS éditions, 2008)、『一年有半』は *Un an et demi* (Les Belles lettres, 2011)として仏訳されている。